

部隊史によると米軍はヤップ島上陸を計画したが陣地構築、水中障害物等の構築速度の速さからヤップ島守備隊の戦力を過大評価し、上陸作戦を取り止め、レイテ島上陸作戦に変更する一因となったそうである。守備兵力は陸軍四、四二三人、海軍一、四九四人、合計五、九一七人、戦死者三四四人となっています。

## 満州・トラック島の戦務

福島県 荒 明 文 衛

昭和十六（一九四一）年衛生兵として検査を受け、甲種合格でした。当時、生家は、福島県河沼郡東松山村で、私は農家の十一弟妹の長男として、大正十（一九二一）年六月三十日に生まれ、家業を継いでおりました。

大東亜戦争が開戦となった四日後の昭和十六年十二月十三日、広島へ集合、即入営となったのです。ですから、十六年徴集兵としては最も早い入営です。とに

かく、真珠湾攻撃で日本国中が歓声を上げている時で、どこの駅でも「万歳！ 万歳！」で送られたのです。入隊は朝鮮羅南の第十九師団歩兵第六連隊ということ、私達は引率者に連れられての出発でした。

十二月十二日、二等兵、現役兵として歩兵第九十六連隊補充隊第一機関銃中隊入営。

同月十六日宇品港出港、十八日釜山上陸（幸いにも海は荒れず平穏な航海）、二十日釜山より鉄道にて羅南着、二十二日羅南出発、鉄道にて洪儀着。

下車しましたが北朝鮮の十二月末ゆえ、会津に比べ大変寒さが厳しいものでした。兵舎に入りましたが山の向こうが凶満江であり、朝鮮・満州・ソ連の境であり張鼓峰のそばでした。兵舎は曾山の反対斜面の土を削り掘り、木造の建物でした。屋根には土を覆せ、外からは判らないようにしてありました。

ここで教育を受け、一期の検閲を済ませました。隊員は福島県の人が多く、後には四国の人も入ってきました。羅南には二個連隊あり、うち一個連隊は補充隊で、私は補充隊でした。

兵舎は全部、二倍の兵員が収容できるように造られていて、「いざ」という時には第一線で動員するからその準備のためであると思われる。師団長は訓示の中で

「ソ連と始まれば、ウラジオを一週間で陥落させる」「兵隊は消耗品」などと言っていました。

私は小指が凍傷にかかり、指が真っ白となって、小林上等兵が「大変だ」と毛布でこすってくれました。

その凍傷の傷が今でも残っています。上等兵が気をつけてくれたから、私は指を落とさずに済んだのです。

手袋をしていたのですが、兵隊に入る前に傷があり、血液の循環が悪かったからでしょう。その時、最初痛くなりましたが、時が経つにつれ指を見たら白くなって、凍傷であると上等兵に言われて大事に至らずに済んだのです。それ以後は気をつけて凍傷になりませんでした。一月八日「陸軍初め」の式典で整列していた時、古参兵は指を揉んでいましたが、私は初年兵だから動かさずにいました。何で揉んでいるのか、また初年兵でも揉んでよいのか判りませんでしたし、古参兵

から教えてもらっていないなかったため凍傷になってしまったのでした。

昭和十七年四月十三日、第七十六連隊野戦隊転属を命ぜられ、慶興郡洪儀発、徒歩三十分で野戦隊第一重機関銃中隊に入り、二〇ミリ自動砲隊となりました。

六月一口一等兵、十二月一日一選抜の上等兵に進級することが出来ました。これは、上等兵候補であるための特別な訓練の集合教育を受けるので、忙しいこと一般とは違うのでした。古参兵・召集兵の洗濯、靴の手入れなどをしながら別教育を受けるのですから、忙しいやら辛いやらの連続でした。

上等兵に進級してから、初年兵の教育助手を召集兵と現役兵と二回命ぜられました。それが終わると班に戻り、古参兵の面倒も見なければなりません。我々の上には現役と補充兵がいるので、にらまれると大変でした。

その後、自動砲が廃止となりましたが、自動砲は命中率が良くないのに私は二発命中し、隊長から誉められました。自動砲中止のため速射砲（三七ミリ）中隊

となりましたが、連隊に一個中隊です。命中率は良いが口径が小さいので、対戦車等では破壊力が無いという弱点がありました。

昭和十八年十二月一日、兵長に進みましたが昭和十九年二月二十八日、「捷号演習」の命で、服は夏服、防寒服、どこへ行くのか判らないが、南方へ行くのだらうと予想していました。その間、一個小隊速射砲二門の指揮班長を命ぜられました。第八派遣隊に転属となり羅南第七十二連隊の第三大隊全部が釜山を出発しました。初めは速射砲一個小隊だけが独立小隊だと言われていて、私は二門の指揮班長を命ぜられていました。

九月二十五日、南洋群島トラック島七曜島に上陸したのですが、輸送船は英国から買った貨物船を改造した。「対島丸」という船で、十隻ぐらいの船団を組み駆逐艦三隻と飛行機が護衛してくれていました。

敵潜水艦が出没するので蛇行しましたが六ノットし

か出ないので相当の日数がかかりました。そのため、我々は常に救命胴衣を着ており、また、ゴムサックに野菜などの種物を入れ持参、沈没したらどこへでも上陸し種を蒔いて生き抜けなどと、沈没時の注意を受けていました。

途中の小笠原列島では海が荒れ、船酔いで物が食べられないうえに、四〇度以上の発熱で苦しみました。が、こんな所で死んでたまるかと思っていました。後に聞くと軍医は「荒明は駄目だから」と船倉に入れられたのですが、同年兵の小山は「大丈夫だから」と甲板へ出してくれ看病を続けてくれました。

私は軍医に匙を投げられましたが、同年兵の品川一等兵も私の看護をしてくれて、私も「こんな所で死ぬ、何としても丈夫になりたい、そのためには栄養をつけるために食べなければならぬ」と思い、炊事から梅干を貰い重湯を一気に吞みました。しかし、すぐに吐きます。吞んでは吐き、吐いては吞むのですが食べねば助からないと、吞み吐きを続けました。私の顔は、その時「死に顔」になっていたらしく、看護の兵

隊が軍医を呼んでくれ、注射をしたら眠るように楽になりました。後に聞くとところでは、私は肺炎も併発していたということでした。

サイパン島に停泊した時は、体温も三十九度と幾分下がってきて、トラック島へ上陸する前に何とか治まって、三十七〜三十八度になり、やっと命びろいしたのでした。

トラック島に上陸、我々は独立歩兵第三三八大隊歩兵砲中隊で、砲は大隊砲と速射砲でした。サイパン島陥落数日前、トラック島へ米機動艦隊が来て、トラック島に対し艦砲射撃、爆撃を一週間続けました。これはトラック島へ上陸と見せかけてサイパン上陸をしたのか、サイパン上陸を阻止させるためのトラック攻撃なのか判りませんが。

トラック島は、珊瑚礁で、航路には日本の機雷が敷設されており、敵艦船は入れませんでした。我が一個大隊には砲兵もおり山砲兵もいました。速射砲は岩盤を掘りトーチカ状にして備えていましたが、トーチカ

作業は岩にハッパ（ダイナマイト）をかけて砕いていました。御岳山という岩盤の高地を要塞として構築し、その落成式をしていましたら終戦となつたらしく、その数日後我々は終戦を知らされたので落胆しました。

終戦となると、朝鮮出身の軍曹が朝鮮兵を集めてカ所にまとめており、敗戦による変化と今後の問題について悩むこともあり、憤ることもありました。

次に、さかのぼってトラック島の戦闘と状況についてですが、島の中にはスパイがいました。空襲になると二カ所に狼煙じろしが上がります。その二カ所を結ぶと夏島の飛行場なので、後にスパイ狩りをしましたが判りませんでした。現地人の中に諜報員みたいのがいたのか判りませんが。

トラック島空襲の昭和二十年四月二十二日、小隊長の渡辺俊中尉が空襲で戦死しました。兵舎が出来たので移動しようとしたが、隊長と指揮班は残っていました。その晩、空襲があり、九発が海へ、一発は外

にいた隊長の所へ落ちました。私は状況を見に行ったら、隊長は血達磨になっていました。破片が左脇腹に当たり、破片が肺で止まっていました。爆弾が落ちた所と、隊長が倒れたところは四〇メートルほど離れていたのですが、野戦病院へ連れて行って負傷状況が判明し戦死してしまったのです。その空襲では小銃隊で二人が負傷しました。

米俵が六俵積んであった側にいた者は助かり、状況を知ろうと早く出た隊長は爆弾にやられたのです。私はデング熱で四〇度も発熱し、寝ていましたが、私の所でなく隊長の所へ落ちたのです。後で米俵を見たら爆弾の破片がいっぱい入っていました。

私が第三機関銃隊に配属されていた時、砲と爆薬の点検をしたのですが、部下の砲が後発した事故のため、私は「進級停止六カ月」の責任を負わされたこともありました。軍隊というところは特に、その責任の所在が確かめられ、その罪が上司に及ぶのです。

米軍は、トラック島を牽制してマリアナ諸島を攻撃していたのです。我が空軍はサイパンへ行ったのです

が、その多くは帰りませんでした。連合艦隊も大きな被害を受けてしまったとは、戦後聞きました。マリアナ、硫黄島、日本本土と攻撃するのが米軍の戦略だったことも後に知りました。トラック島へは上陸せず、孤島として封じ込め、置き去りにされていたということでした。

終戦後は現地で待機ということでも島におりましたが、「男は去勢される」とか、いろいろなデマが流れており、正確な情報は判らず、不安な日々を過ごしたことは事実です。何しろ、日本は負けた経験が無いので、無理ありませんでした。

そのうち、我々部隊は夏島に集結され、その間「兵器をまとめろ」と言われ、砲弾は大発（日本の上陸用舟艇）に乗せて海へ捨てました。しかし、食料の補充はつかぬので、約一年間、自給自活をしなければならぬので、芋を自活栽培しました。芋は、三、四カ月で芋になり、葉も食料とすることにしました。

何しろ補給が無いし、貯蔵食料も少なかったので、

島中の椰子の実は全部なくなり、ネズミ、トカゲは動物性蛋白質として貴重なものでした。自給自活ですから、中隊全部が自活体制を作りました。農家出身者である私は自活班長となり兵隊を指揮し、食料の増産に努めました。

当初一人生芋三〇〇グラムというが空腹なので、バナナを隠して食べたりしていました。そのうち、主食の芋の生産も進み、多く配給され、なんと空腹をしのげるようになりましたが、生の芋を食べ過ぎると下痢となり、南瓜は黄痘のように黄色い肌になります。玉葱は消化が悪く下痢を起こしやすいが何とか生き延びる生活を維持することが出来、自活班長の責任もどうにか果たせました。また、海軍の輸送隊は魚を取り、我々陸軍の芋と交換した人もいました。

四カ月間、自給班長をやったのですが、その間、米軍から珍しい缶詰など若干は支給されました。米軍からは労働の命令はなく接触もほとんどありませんでした。我々は自分の食料の生産が主な仕事という生活をしていました。しかし遠く離れた南洋での不安は、い

つ帰れるか、日本内地はどうなっているのか等多くの悩みをかかえていましたが、家族の安否が一番の心配でした。

いよいよ帰還となり、乗船時の所持品の検査の時、米軍と接触しました。昭和二十年の十二月になっていたので、船中、クリスマスの晩に黒人兵にいじめられました。が、将校は紳士的でありました。しかし兵隊で、自分の名を書けない人がいました。二世の兵が日本語で話をし懐しがつていたことは今でも思い出されます。昭和二十年十二月二十九日、神奈川県浦賀に上陸し、三十一日大晦日に復員しました。

電車に乗ったのですが、窓ガラスは一枚も無く、南洋帰りの私達には冷たい内地の風が身にしみました。上野駅で乗り換えました。が街は焼け野原で何も無く、家に電報を打とうとしたが何時に着くのか判らぬというので、知らせることも出来ず夜行列車に乗りました。

幸いに、列車は会津若松まで直行出来ました。若松

の叔父の所に泊まり、若松から叔父に送られて帰宅を  
しました。自宅では朝鮮から南方へ行っていたのは知  
りませんでした。家では、私の下は妹で、弟は適齡  
喜んでおりました。家では、私の下は妹で、弟は適齡  
の前ぐらいでしたから、兵隊には行かず全員無事でし  
た。

## 関東軍の精銳、南方戦線へ

栃木県 村上 博

私は農家の長男に生まれ、両親と弟三人、妹三人の  
兄弟で育ちました。高等青年学校卒業後、農業を手  
伝っていました。甲種合格で現役兵として昭和十八  
（一九四三）年一月、宇都宮東部第三十六部隊に入隊  
し、第三大隊歩兵砲隊に入隊しました。在隊一カ月  
後、渡満のため出発、釜山經由列車で北満州のチチハ  
ルの宇都宮第五十九連隊（第二一九部隊）に追及しま  
した。

初年兵教育は精強を誇る関東軍の伝統を守る峻烈極  
まるものでした。

九二式歩兵砲の分解搬送は四つの部分に分解して担  
ぎます。砲身だけでも五〇キロもある重さです。「分  
解搬送」の号令が下りると号令を聞いただけで身が凍  
る思いがしました。交代なしで八時間も歩いたことも  
ありました。辛い初年兵教育も無事終わり、一等兵に  
進級し観測手として特別訓練を受けることとなりました。

観測手は砲隊では農家の長男のような訳であり、観  
測の適否で真の砲の威力が問われる重要な重責を負う  
ので、一生懸命勉強しました。

また観測手は観測班として訓練が行われたので、内  
務班の空気が怪しいと観測訓練室に退避して古年兵の  
制裁から免れることもありました。「下士官候補とし  
て志願せよ」と上司より勧められましたが、長男であ  
るので志願を断りました。志願していたら今日の私は  
なかったと思います。

昭和十八年八月、師団の大興嶺突破演習が行われま